

『翰林五鳳集』について

On "Kanringohōshyū"

— 近世初期漢文学管見 —

蔭 木 英 雄

一、はじめに

五山文学とは、「日本の五山制度の官寺に籍を置いた禅僧が創り出した、中世の漢文学」である。政治史と文学史の時代区分がずれるのは当然で、中世の終焉と共に、五山の禅僧が全く文学の制作をやめたわけではない。筆者は旧著『五山詩史の研究』において、五山文学の下限を元和元年（一六一五）に置き、その理由の一つに、鹿苑僧録・蔭涼職の廃止をあげておいた。この考えは今も変えるつもりはないが、もう少し、前後の事情をみてみよう。

慶長十九年（一六一四）三月九日、徳川家康は駿府に有節周保ら五山僧を集めて『法華経』寿量品の「宝樹多華菓、衆生所遊樂」を題に偈頌を、『論語』為政篇の「為政以德云々」を題に文を作らしめた。さらに同年五月十一日、徳川秀忠は江戸城に五山衆約二十名を招いて、『法華経』方便品の「是法住法位、世間相常住」を題に詩偈を、『論語』顔淵篇の「君子之徳風云々」を題にして文を作らせ呈出させた。出題に徳川幕府の宗教・文教政策が反映されていて興味深い。まさに五山文学史の最後を飾る盛事であった。そして、翌元和元年、豊臣氏の大坂城は落ち、公家諸法度と共に諸宗諸本山諸法

度が制定されたのである。

中国では、正史は前朝が滅亡して後、次の王朝によって作られるのが常であった。いまここに採りあげる『翰林五鳳集』も、中世の五山文学が終焉してから、その集大成として編纂されたのである。しかし、『翰林五鳳集』（以下『五鳳集』と略記）の成立事情を考察してゆくと、どうしても近世初頭の播紳漢文学に論及せざるを得ない。従来の近世漢文学史は、殆んど、藤原惺窩、林羅山らの儒者から論じ始められているので、この機会に小稿で、後陽成・後水尾両帝をめぐる近世初頭の漢文学を概観するのも、意義なき事ではあるまい。

二、成立の事情

本朝風俗之所業者、以歌為最、以詩次之。因茲勅撰之歌集、雖其數甚蕃、未聞及于詩。今也皇帝陛下（中略）非啻興和歌道、況又修詩律廢執不仰讚哉。一日課百僚、采輯五岳前輩後生所品題詩什（中略）此集之發端、「江春入旧年」之題、偶合古今集卷頭之詠歌。歌与詩其名異、而其意同者乎。

(傍線傍点は筆者。以下も同じ)

これは以心崇伝筆序文の一部である。以心崇伝は平安初期の三勅撰集『凌雲新集』『文華秀麗集』『経国集』の存在を知らず、『五鳳集』が日本最初の勅撰詩集だと思っている。そして『五鳳集』巻頭の瑞岩龍惺作「江春入旧年」は、最初の勅撰歌集『古今和歌集』巻頭の「ふる年に春たちける日よめる」という在原元方の歌と「偶合」と述べているが、本当に偶然の一致だったのだろうか。筆者には、「江春入旧年」を巻頭に置いたのは、古今伝授を重要視した当時の詩歌観を反映しているものと思われ、また、誤解であるにしろ、『五鳳集』が『古今和歌集』と同じく、最初の勅撰集であるという気負いがこの巻頭作の撰択に感じられるのである。

ところで、ここで気になるのは、剛外令柔の跋文の次の白ヌキ傍点の語である。

日東上皇、聰明文思(中略)一朝使百僚輯録古来五岳諸彦(中略)今人之詩。

傍線部は序も跋も同一趣旨であるのだが、以心崇伝が、『五鳳集』は皇帝陛下即ち後水尾天皇の勅撰であると記しているのに対し、剛外令柔は日東上皇即ち後陽成上皇の院宣によると述べているのである。近年では、辻善之助『日本仏教史』近世篇、菅原昭英分担執筆『国史大辞典』、今枝愛真執筆『日本古典文学辞典』など、多くは後水尾天皇勅撰説で、管見に入る所では、『大日本史料』のみ後陽成上皇説を採っている。序も跋も、後陽成上皇が元和三年八月二十六日に崩御されてから六年後、元和九年に執筆されているので、常識的には

前者が妥当であろう。しかし『五鳳集』の集名などを考えるとき、後者の説もあながちに捨てきれないのである。

以心崇伝は序文で集名の由来を精しく述べている。五鳳の五については、五星・五岳・五瑞をあげ、「五鳳」というのは、漢の孝宣帝の年号(BC五七―BC五四)である事、宋の太宗の時の賈黄中・宋白・李至・呂蒙正・蘇易簡の五人を、扈蒙が「五鳳齊しく飛んで翰林に入る」と詠じた事などをあげ、さらに徳川家光の下で五瑞(公侯伯子男の諸侯)が名翼を九天に展べている事を述べている。しかし、筆者が『翰林五鳳集』から直ちに想起したのは、『鳳城聯句集』であった。この集の序文は、

慶長年間、太上皇游思典籍、屢召搢紳繼徒、催此遊於鳳城。と、後陽成上皇が慶長年間に、鳳城(院御所)で聯句会を屢々開かれた事を記している。後水尾天皇に讓位なされたのは慶長十六年五月なので、右の「慶長年間」というのは自らわかる。院御所詩壇の主なメンバーは、搢紳では、八条宮智仁親王、中院通村、阿野実頭、舟橋秀賢、山科言緒、土御門(安倍)泰重らであり、繼徒では、剛外令柔、友竹紹益、梅印元冲、集雲守藤、古澗慈稽、英岳景洪、玉峰光璘、有節瑞保、最岳元良、雲岳靈圭、月溪聖澄、越溪礼格、梅心正悟、怡伯令悦、有雅元廣らであった。以心崇伝はその日記に、

次に寺中学問に心懸け候者、御聯句に召さるべき間の旨、仁体相い撰び、是より申し上ぐべく候。△『本光国師日記』慶長十八・霜月・十六▽

という書信を玄庵に送った事を記しており、以心和尚が文学僧を後

陽成上皇に推薦していたことが分る。これら聯句会には、上皇は『小略相句』⁽³⁾の如き韻書を座右に置いて、臨御されたものと思われる。さて、『鳳城聯句集』を繙くと、

聖代覽輝鳳、聖代に輝く鳳を覽る（舟橋秀賢）

鳳知天聖至、鳳は天聖の至を知る（八条宮）

などの句が見える。又、『仙洞三千句序』という文章で、集雲守藤は、

粵、吾太上天皇（後陽成上皇）委万機于東儲、在仙宮日、文賦歌頌六藝之余、倡于聯句述作、而追慕故人極唱年尚矣。或時論百僚曰、「曾時有横川・桃源二甘露江東三千句」。中間有策彦・江心両著宿城西四千五百韻。拳世詠之筆之、共伝于無窮。寔偉哉。越于今。上皇望余光、將救頽風、選試五岳俊衲九城寵臣於鳳闕、各令言志者、從東韻到咸韻三千句。と述べている。これを要約すれば、

(1) 上皇は万機政治を後水尾天皇に委ねられたあと、文賦歌頌にお励みになり、

(2) 故人の名句を長年追慕されたこと。

(3) 例えば、横川景三と桃源瑞仙が応仁の乱を避けて近江永源寺に疎開する途中、三千句を連ねた佳事や、策彦周良と江心承董との『城西聯句』など五山文学僧の作品を上皇は愛された事、

(4) 仙洞の寵臣や五山の俊僧を選ばれた事。

が述べられている。この『仙洞三千句』の延長線上に、『五鳳集』が編纂されたと考えられるのである。そこで、いま一つ決定的な根拠

『翰林五鳳集』について

に欠けるが、筆者は、

『翰林五鳳集』は、後陽成上皇の御遺志を受けついで、後水尾天皇の勅命により、元和九年に完成した。⁽⁶⁾

という仮説を提唱したい。なお、元和九年はあたかも後陽成上皇七回忌に当たるのである。

次に、父上皇の御遺志を継いだ後水尾天皇の漢文学について略述しておきたい。管見の及ぶ所では、慶長十六年三月二十七日御踐祚の当初は、宮中での詩会や聯句会の記録は殆んど見られない。

筆者は先学より、「ないという存在否定語は學術論文に書いてはいけない。未見のものが一例でも存在すれば、その論文は無価値となるから」と耳にたこが出来るほど聞かされていたのに、つい「見られない」と書いてしまった。逃げ道として、「管見の及ぶ所では「殆んど」と限定的否定としたもの——。

後水尾天皇を中心とする文雅の会が見られるのは、御即位後三年目の慶長十八年頃からである。それまでは御学問の記録が多い。例えば、慶長十七年八月十日から十回にわたって、月溪聖澄の『古文真宝』進講を聴いておられる。一例として、元和四年の一年間に限り、後水尾詩壇の行事を列挙してみる。

- ① 三月二十五日和漢聯句会（時・土・孝）
- ② 閏三月四日漢和聯句九句（土）
- ③ 同十九日漢和点取聯句（土）
- ④ 四月八日漢和聯句一巡（土）
- ⑤ 同十三日漢和聯句再巡（土）
- ⑥ 五月十二日
- ⑦ 六月十日
- ⑧ 八月十一日何れも漢和聯句会（土）
- ⑨ 九月一日
- ⑩ 同二十一日何れも漢和兩吟（土）
- ⑪ 十月一日点取聯句六句

△土▽ ⑫ 同二十九日 ⑬ 十一月十四日 ⑭ 同十六日 ⑮ 同十七日
何れも聯句兩吟△土▽ ⑯ 同十九日兩吟八句△土▽ ⑰ 同二十日
漢和一巡△土▽ ⑱ 同二十一日兩吟八句△土▽ ⑲ 同二十六日兩
吟百句終△土▽ ⑳ 同二十九日漢和聯句會△時△土▽

△時▽時慶卿記 △孝▽孝亮宿弥日次記 △土▽土御門泰重記

以上の主な出席者は後陽成詩壇と殆んど同じで、ただ播紳では近衛
信尋、西園寺公益、西洞院時慶・時直、高倉永慶・嗣良らが新しく
顔を見せている。少し会の状況を点描してみよう。

②の閏三月四日、宮中四番詰の土御門泰重はお召しによって参内
すると、帝は酒盃を傾けながら竹内孝治と歌仙を話題にしておられ
た。泰重は沈酔して一度は退出したが、またお召しを受け、夜半ま
で帝と二人で九句連ねたのである。右表の「兩吟」というのは、後
水尾天皇と泰重の二人だけの聯句をいう。

⑨の九月一日、漢和兩吟の点取りの勅命が五山僧の集雲守藤に
下ったが、集雲和尚は辞退した。また漢和兩吟とはいえ、⑩の九月
二十一日のように、和句しか出来ない日があった。

⑲の十一月二十六日の兩吟百句の点が十二月十一日にやっど宮中
に届いたが、御製には二十三句、土御門泰重の作には十三句点がつ
いていた。泰重は、

予十句負けたり。近比無念の次第なり。叡感浅からざりし事此の
如くに候。

と残念がっている。点者が御製に甘かったのかも知れぬが、後水尾
天皇の作句の進歩は著しいものがあつたのだらう。

晩に二句御製有り。僧衆の御製承り度く申すに依り此の如くに候。
左右方共、御製玄妙の由申され候なり△元和七・十二・九▽。
と、昕叔頭暄や剛外令柔ら僧衆も御製に感歎している。

なお、『延宝伝燈録』卷三十五には、禪を修めた天皇が十二人記さ
れているが、その中に後陽成・後水尾兩帝が入っていることを特記
しておこう。

以上述べた如き後水尾天皇が、父上皇の御遺志をついで『五鳳集』
を完成せしめられたという筆者の仮説は、あながち荒唐無稽なもの
ではあるまい。

さて次に『五鳳集』成立の意義を探ってみた。跋文には当時の
五山僧の日本漢文学史観が示されている。とはいへ、剛外令柔は通
史的に日本漢詩史を述べているわけではない。中国詩特に浮屠氏
(僧侶)の詩の流れを叙述するあい間に、日本漢詩史を断片的に記し
ている。そして剛外が強調しているのは、

- (1) 上は詩を以て下を化し、下は詩で上を諷すという詩の効用。
- (2) 王者は詩を愛す。
- (3) 詩禪一致。

の三点で、特に(2)(3)に力を入れている。剛外和尚はまず注(2)のよ
うに古代漢文学を述べたあと、一足とびに室町時代に言及する。書
き下してみよう。

本邦の選纂する所、『百人一首』『花上集』の両帙有り、近代の風
騷の耆宿これを賦す。詩道を補うものは尽く其の精を拵びて録す。
然れば則ち禪は必ず詩に通じ、詩は必ず禪に通じ、禪詩共に妙悟

有り。豈に快ならずや。

と、空海の『性靈集』、菅原道真の『菅家文章』、撰集である『本朝麗藻』、『本朝文粹』、『本朝無題詩』、『類聚句題抄』及び五山禪僧たる義堂周信撰の『貞和類聚祖苑聯芳集』などを省略（存在を知らなかったものもある）として、横川景三撰『百人一首』と文學契撰『花上集』をとり上げている。そして時代順を逆にして、

又、中古に『新選』『新編』の二集有りて世に行なわる。默雲師其の萃を抜きて『錦繡段』と称するなり。

と江西龍派撰『新選集』、瑞岩龍惺・慕哲龍攀撰『新編集』をあげているのは、この二集が中唐より元末までの中国詩を集めているので、日本の『百人一首』などの後にあげたのであろう。跋文の日本漢詩の流れを整理すると、

- ① 持統帝の周詩学習 — ② 嵯峨帝の神泉苑詩会 — ③ 『新選集』
- ④ 『新編集』 — ⑤ 『錦繡段』 — ⑥ 『百人一首』 — ⑦ 『花上集』 — ⑧ 『翰林五鳳集』

ということになる。①②⑧は、剛外令柔の「王者は詩を愛す」「古より帝者の詩を好む者、振丹扶桑一片の皇風なり」以心崇伝の「王者は詩を学びて天下を安んず」という詩観の具体的事象なのである。そして序と跋にいう王者・帝者とは、言うまでもなく後陽成・後水尾兩帝を念頭に置いての語である。もう一度、筆者の仮説を提示しておこう。

『翰林五鳳集』は、後陽成上皇の御遺志を継いだ後水尾天皇が、天下を安んじ社稷を保つ為、また下を化し風俗を移す為に、舟橋秀

『翰林五鳳集』について

賢・土御門泰重・剛外令柔・集雲守藤ら百僚に命じて、文字を離れ別伝を立てる捷徑である禪詩、もつと具体的にいうと、中古以来今人までの五岳の詩を采輯せしめた、五山文学唯一の勅撰詩集である。

二、撰者(一)

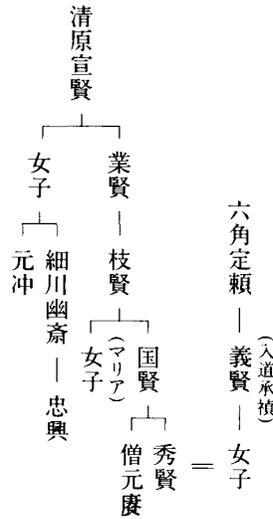
『五鳳集』の序文は「一日課百僚」と記し、跋文も「一朝使百僚」と述べて、撰者の名を明記しない。前述の「仙洞三千句序」に、選試五岳俊衲九城寵臣於鳳闕

とあるのを見ると、百僚は五山の文学僧と仙洞の寵臣と考えてよい。しかも二人や三人ではあるまい。『五鳳集』の撰者を考えるということとは、江戸時代初期の公家や禅林の漢文学を明らかにすることにもなるので、単に撰者を短絡的に推定するだけでなく、少し視野を広げたり時には脱線したりしながら考えてゆきたい。

まず第一の手がかりになるのは、後陽成院詩壇の人々である。『智仁親王御記』、『御湯殿上日記』、『時慶卿記』、『孝亮宿祢日次記』、『慶長日件録』、『鹿苑日録』などを見ると、後陽成院は天正十四年御即位以来、頻々として聯句会や詩歌会を催しておられる。また舟橋秀賢より『周易』、『大学』、『尚書』、『論語』、『孝経』を聴講され、梅印元冲より『錦繡段』、月溪聖澄より『古文真宝』を聴聞されている。これら御会の漢句の常連作者の中から、『五鳳集』撰者を推定しても間違いない。

舟橋秀賢

まず舟橋秀賢をとりあげる。『清原系図』（統群書類従所収）によると、清原氏は舍人親王の孫の夏野が始祖で、以来、学問の家柄として栄えた。吉田兼俱の実子でありながら、清原家を襲いだ宣賢からの家系は次の通りである。



別の『清原系図』は、宣賢の女は三淵伊賀入道宗薫に嫁ぐ前に、將軍足利義晴の寵愛を受けて、生まれたのが細川藤孝（幽斎）であると記している。枝賢の女はキリスト教の洗礼を受けてマリアと称し、細川忠興夫人即ちガラシャの侍女になった。また、秀賢の実弟の元慶は、細川忠興の叔父に当たる梅印元冲の弟子となっている。こういう二重三重の関係により、舟橋秀賢は古今伝授の細川家と親交を結んでいるのである。

父の国賢は従三位大藏卿にまで昇進し、慶長十九年十二月十八日に七十一歳で没したが（秀賢は同年六月二十八日、四十歳で父に先立つ）慶長勅版『日本書紀神代卷』の国賢の跋文は、明経道と神祇道との混合説として注目される文章である。近衛家熙（後水尾天皇の外孫）述の『槐記』に、次のような国賢父子のエピソードが記されている。国賢は

毎日出勤する時、幼少の秀賢をふごの中に入れて空中に吊り、帰宅するまで一つの書物を読了する事を課した。しかし継母は寒暑の酷しい日、「少しは休みなさい」と下におろしてやった。後に秀賢は「継母の姑愛がなかったら、もっと秀才になれたろうに」と後悔したという話である。

清原秀賢は近衛信尹の勧めで舟橋氏を称するようになったのだが、正月元旦の行事は舟橋家の家風をよく表しているので、『慶長日件録』（以下『日件録』と略記）の慶長八年の該当部分を書き下しておく。

家中の祝儀例年の如し。（中略）愚亭の東の四畳敷に机を構え、四聖人・朱文公の像等を懸け、像前に餅、ひしはなひら、かえ、かちぐり等を供う。烏帽子道服を著、乾坤二卦を讀誦し了る。（中略）次に看経。まず護身神法、次に清浄秘、次に中臣秘（中略）次に三元咒等讀誦し、心中に日本三千余座を勧請す。（中略）次に諸真言、次に文殊経荒神経を讀誦す。次に吉書、

天下泰平 四海安全 財宝充屋 官位如心 学及大儒 智能中道 孝湿顔巷 德排孔門

吉書の書様、右の文は四行に書く。

明経道の家なので四聖像を祀るのは当然だが、宋儒の朱文公を祀り、仏教経典を読む如く乾坤二卦を誦し、神道の祝詞を唱え、はてには真言陀羅尼から荒神経を讀誦するに至っては、まさに儒・仏・神混交の新年祝儀である。そして吉書に、天下太平や学智孝徳に加えて、「財宝が家屋に充滿し、官位が思い通りに昇進しますように」と現世の名利をあからさまに祈念している。舟橋秀賢は俗臭紛々たる現実

主義者であつた。

ともあれ、式部少輔舟橋秀賢は、四書五経や諸子百家の講義に寧日なき有様であつた。「齋罷り舟橋殿に赴き、三略の講義を聴く」[△]「鹿苑日録」慶長十二・五・十五[▽]というような、自邸での対象者不明の講義を除いて表示してみる。

周易[△]後陽成天皇^⑩

毛詩[△]聖護院興意法親王 花山院少将(忠長か) 御靈法眼 道安

山田長吉

尚書[△]紹元 観音房頼玄

春秋左氏伝[△]紹元 久遠院皓叔 御靈法眼

大学[△]後陽成天皇 政仁親王(後の後水尾天皇) 九条忠栄 中院通

村 高倉永慶 冷泉藤寿丸・千寿丸 豊臣秀頼^⑪ 吉田幸鶴丸

(後の兼英) 観音房頼玄

中庸[△]八条宮智仁親王

論語[△]後陽成天皇 政仁親王 相国寺衆 冷泉侍従 速水彦三

郎 高野僧三人

孟子[△]後陽成天皇 政仁親王 照高院宮道澄法親王 竹田宰相

観音房頼玄

孝経[△]後陽成天皇 政仁親王 鷹司信尚 吉田幸鶴丸^⑫・鶴善丸

小学[△]紹元

蒙求[△]九条大納言

三略[△]東光寺僧 紹節父子発起 九条忠栄 听叔頭暉

六韜[△]不明^⑬

『翰林五鳳集』について

古文真宝[△]九条忠栄

朗詠集[△]曼珠院宮良恕法親王 高野僧三人

職原抄[△]九条忠栄 竹内孝治 金子内記 玄音坊(奥州会津感応寺

の僧) 日野侍従

もちろん、舟橋秀賢は講義をするばかりではなく、『毛詩』の聴講に度々円光寺の閑室元信のもとに出かけている[△]慶長十二・九・二以降[▽]。彼が禅僧や儒者と広く交際していた事は、右の表からも首肯出来よう。まず禅僧との交わりをみてみよう。

前述の『清原系図』によると、実弟の有雅元廣は南禅寺語心院の梅印元冲(細川幽斎の弟)の弟子であつた。「語心院冲長老参内に依り、

則ち和漢一折俄かに御興行、御発句は御製なり」[△]慶長七・二・二[▽]というように、梅印元冲は後陽成天皇の文学のよいお相手で、天皇に『錦

繡段』を進講した[△]慶長九・四・八。同月二十七[▽]。法系は、

月林道皎[△](六代略) — 梅印元冲 — 有雅元廣

で、いわゆる大幢派^⑭である。この血縁と法縁とにより、舟橋秀賢は梅印元冲と親交を結ぶ。例えば、正月には烏子百枚を携えて挨拶に

赴き[△]慶長五・正・二十八など[▽]、宮中和漢会のと梅印・以心の両和尚を自邸に泊め[△]慶長六・十二・二[▽]、梅印が重病となるや秀賢は屢々見舞い、

齋了り南禅寺へ行く。夜前冲長老寂滅す云々。仍て吊の為に恨歌を企てぬ[△]慶長十・七・二十五[▽]。

と、示寂の際には恨歌を作っている。その後、

次に南禅寺語心院へ行く。聴松三長老(玄圃靈三)へ行き小錫二封を遣わす。次に牧護庵伝長老(以心崇伝)へ行き檀紙一束を遣わす。

一五

愚弟廣侍者（有雅元廣）の事を頼み入る由、相談し畢んぬ
 ▲慶長十・八・二六▽。

と記すのは、弟の有雅元廣の語心院相続を運動したものであろう。
 現実主義者の彼としては当然の行動である。

舟橋秀賢と五山僧との繋りは、単に俗縁によるものではなく、文学・学問上でも深く関わっており、それは広く公家衆と五山衆との交わりでもあった。即ち禁中和漢会、仙洞聯句会、陽明和漢会、そして南禅寺漢和会などで両衆は常に同席し、その上に猪苗代兼如や里村昌琢らの連歌師が加わっているのである。

秀賢は儒者の林又三郎（羅山）とも交わっている。『日件録』に、「林又三郎来談。双樽兩種恵まる」▲慶長八・十二・二十九▽というのがそれである。これより先、林又三郎信勝は『論語集註』を京都で講じ、それが勅許を得ていなかったため、舟橋秀賢より非難されていた。⁽¹⁶⁾この日の訪問はこの事件の挨拶の為であろう。林信勝は『野槌』に、
 当時日本にて、初めて書をよむには、奏問せぬは罪なり。国法ありなど云人もあり。それを何ともかけおもはず、ただいよく続けり。

と記している。しかし、両者は絶交には到らず、二十一歳の又三郎は同年三月に藤原惺窩に入門した後も、「林又三郎礼に来る。扇五本給う」▲慶長九・正・二▽、「林又三郎来る。菓子折恵贈せらるる間、即ち女御殿に進上し畢んぬ」▲同年四・二十七▽とあるように舟橋邸を訪れている。二人が新旧儒学の相異を論じたか否かは分らぬが、「次に意安・道春等来訊し、累刻打話」▲慶長十六・十七▽と交際を続けている。

慶長九年閏八月三日、冷泉為満や山科言緒と共に徳川家康に謁した舟橋秀賢は、家康から新注と古注の相異を質ねられた。「子答え申して云く、『新注の義理は精微なりと雖も却て浅し。古注はその義精しからずと雖も、却て道を得て心処深し』と將軍の御心に叶うものなり」と答えたのは、清原家嫡流として当然であった。しかし、「性理字義を（紹元に）返し遣わす」▲慶長九・九・二十九▽というように、秀賢は宋の性理学も学んでいるのである。朱子学を官学とした徳川家康が、古注を称える秀賢の返答を納れたという『日件録』は彼の希望の主観が混っており、古注を奉ずる舟橋家でも朱文公像を祀ったりして、時代は朱子学が大勢を占めており、現実主義の秀賢は順応せざるを得なかったであろう。

さて、本稿は舟橋秀賢が『五鳳集』撰者の一人である事を推定するのが、第一の目的であった。彼の文学について考えてみる。

東皇和氣徳無愆 自学堯觴祝万年 四始若今以詩比 群臣可詠
 鹿鳴篇

○東皇 春又は春風の意だが、日東皇帝（五鳳集）跋文に用例）即ち後陽成天皇を暗示 ○堯觴 古の聖天子陶唐のゆたかな盃。「孔叢子」によると、堯舜千鍾（堯舜は千鍾の酒を飲んだ）という遺詠があった。○万年 毛詩「大雅」江漢「天子万年とある。○四始 毛詩の風の始の「閔雎」、小雅の始の「鹿鳴」、大雅の始の「文王」、頌の始の「清廟」をいう。○比 毛詩「大序の六義の一。また「易」六十四卦の一の比は、四海の人が上一人を仰ぐ象で、この場合ふさわしい。○鹿鳴篇 君が臣を召して饗応するのを喩えた詩。

（訳）春の気候は和やかで皇徳は道にたがうことがなく 一人ゆたかな酒盃をあげ

て聖寿と自寿の方歳を祝う。元且のいま『毛詩』の作にたとえるなら 群臣
よ、あの鹿鳴篇を詠うがよい。

これは慶長五年、秀賢二十六歳の作で、朝鮮文人の竹溪の和韻も『日
件録』に記されている。煩雑な語注を付したのは、彼の苦心の跡を
知る為であるが、労作にもかかわらず個人的文学的価値は低い。も
う一首、慶長十五年正月一日、四方拝の宮中儀式からの帰途に吟じ
た五言を読んでみよう。

夜深鷄未催 朝已禁門開 登殿拜天子 候時望斗輝
学懷韓愈仰 書慕鄴侯堆 其述吾人祝 猶對長命杯

○鄴侯堆 唐の李泌の父の鄴侯李承休は蔵書二万余卷を有した。韓愈「送諸葛覺往隨
州讀書」に、鄴侯家多書とある。

(訳) 夜が深くて鷄はまだ鳴かぬが 朝廷ではもう宮門が開いた 殿上に登って
天子に拝謁しようと 候っている時北斗星の輝きを眺めた 学問は韓愈を
懐かしんで仰ぎ見 書籍は鄴侯の大蔵書を慕う 私どもの祝詞を述べて
長寿の盃をくみかわした

学者らしい作品だが構成の緻密さに欠け、あたかも聯句を読む感が
ある。四聯とも対句で成っているからだろう。歳旦という制約があ
るにしろ、兩作品とも詩情の深さが無い。これが当時の平均的水準
作なのだろうか。

舟橋秀賢は、「禁中和漢御会。予執筆」(慶長五・二十九)と記すよう
に、禁中和漢会で執筆し、以後禁中のみならず近衛信尹邸でも屢々
執筆を勤めている。また「今日指合(付合の法則違反)以下御再見有之」
(慶長九・九・六)と天皇の御点検に奉仕している。「孟子を講ず。次に禁

『翰林五鳳集』について

中和漢御会の第四句目仕るべき由の仰せあり。仍て兩句の吟案を
内々申し上げし処、端が然るべき由仰せなり」(慶長十二・九・十三)と、
後陽成天皇は預め秀賢に二句作らせて、御自身の句が付け易い方
お選びになった。その翌日には、

晴、早朝勾当局へ参ずべき由御使なり。則ち伺候せし処、来る十
八日の和漢御会に、東福寺不二庵藤長老、龍吟の珊長老を出席せ
しむべしや否や、書状を遣わすべき由仰せなり(同年九・十四)。

と、会に集雲守藤と友山龍珊が出席するか否かを問い合わせている。
秀賢は後陽成天皇の和漢御会の事務長的役割を果たしているのだ
。筆者が舟橋秀賢を『五鳳集』撰者の一人に推測した根拠はこの
辺にある。

夜に入り御前(後陽成天皇)に参る。御雑談ども有り。次に聯句兩吟
御沙汰有るべきの由勅定なり。仍て章句(第一句)はくじ取り次第
遊ばさるべし云々。予これ(章句)をくじ取る。然りと雖も即時に
吟じ難き故、章句は御製なり(慶長十二・九・十八)。

と夜になり天皇と二人で句を聯ねる秀賢であった。信任が厚かつた
のである。作品を読む。

秦家蕃蜀錦 御製 秦の家の蕃薇は蜀の錦に匹敵し
漢岸菊燕脂 秀賢 漢水の岸の菊は燕の燕脂のように美しい
舟被繫佳景 同 舟は美しい風景の中にながれ
硯其磨小池 御 硯に磨られた墨汁が池にたまる
霞紅山艘畫 同 赤い夕霞の中に山と舟が画かれ
雪白座題詩 秀 白雪を席題に詩を詠む

文苑坡春色 同 文人の死あきや堤は春景色である。

子の刻入御したまう。

○蜀錦蜀（秦が置いた郡名）の錦江で濯すすった錦。○燕脂燕（べ）に。『事物紀原』によると、秦宮中の紅粧はすべて燕脂による。○艘舟（ふね）。なお字は異なるが、舟亭の前

の偃月池で蘇軾はよく硯を洗った。○坡つづみ。なお坡公、坡仙は蘇軾のこと。

読む者に文学的感動を与えるような作でなく（聯句の目的は遊楽）、夏の夜を君臣唱和して楽しんでる。

退位後も、後陽成院が聯句に興ぜられた事は『鳳城聯句集』に明らかであり。舟橋秀賢は弟の有雅元廣と共に、屢々仙洞御会に参じている。

慶長十八年正月五日、三十九歳の彼は従四位上に叙せられた。その時、西洞院時慶は、

秀賢朝臣は去年は四品、又当年従上に加階なり。年々三年続き若輩の衆思あはう俛ひに官位を給たまう。果報の儀なり△『時慶卿記』慶長十八・正・十
九▽。

と非難めいた文字を連ね、山科言緒も同様の趣を記している。秀賢はまさに陽の当たる官僚街道を歩いた果報人で、後陽成・後水尾兩帝の寵臣であった。慶長十六年六月二十八日、四十一歳で老父に先立って卒去した時も、時慶は、

後に聞く、舟橋遠行すと。今度官位忒の振舞、諸篇打紛義によりて歎、両眼盲と。可畏可畏△六二八▽。

舟橋が事不届義、又官位の義等なり△七十七▽。
と記している。現実主義者の舟橋秀賢は、官界の一部から嫉妬視さ

れるような性行があったのだろう。

制限の紙数が尽きた。以下、『五鳳集』撰者の推論をもう三、四人述べ、収載主要禅僧論、集の詩風の特徴など論じたいが、それらは次号に譲る。
(未完)

(1) 例えば、松下忠『江戸時代の詩風詩論』、戸田浩暁『日本漢文学通史』、山岸徳平『近世漢文学史』などは、いずれも近世の宮廷貴族の漢文学に触れていない。

(2) 『五鳳集』巻末にある剛外令柔の跋文は、『竊かに聞く、日本人皇四十一代持統天皇は周詩を学び、吾が朝の風と為す。同五十二代嵯峨天皇は弘仁三年、神泉苑に於て文人を召し、詩を賦せしむ。古より帝者の詩を好むは、振丹扶桑一片の皇風なり』とあって、古代の漢文学史観を示している。

(3) 『妙智院文書』によると、後陽成上皇は有節瑞保に命じて、妙智院から『小略句』を借りて写しておられる。この本は前妙智院主策彦周良が渡明した際、寧波の芳梅崖に外題を書いてもらったもので、帰朝後、後奈良院の和漢聯句会に袖に入れて参内したところ、院はお手づから御覧になったというものである。

(4) 『城西聯句』は策彦周良が、天龍寺第百八十六世住持に就いた江心承董と、天龍寺山内で九千句をつらねたものである。策彦は第一回入明に際しこの聯句集を携え、寧波第一の文人たる豊坊に序文を書いてもらった。なお、跋文は惟高妙安の作である。

(5) 『鹿死日録』△元和元・八・三▽に「大徳寺沢庵和尚光駕。（中略）大統古淵和尚携仙洞三千句跋来臨」とあるのを見ると、「仙洞三千句」は元和元年八月以前に成り、古淵慈積が跋文を制作している。『土御門泰重卿記』△元和四・十一・二十一▽には、「光西堂ニハ仙洞三千句御尋被成候」とあって、後水尾天皇は舜岳玄光に仙洞三千句を尋ねておられる。

(6) 後陽成天皇と政仁親王（後水尾天皇）父子は決して睦じかっただのではない。後陽

成天皇は弟宮の八条宮智仁親王(十歳の時、豊臣秀吉の猶子となる)に讓位なき御意思を抱いておられたが、徳川家康の奏請により政仁親王に皇位を譲られたのである。しかし、「一絲和尚へ遺はさる硯の銘」で後水尾天皇は、(硯は)故院(後陽成上皇)のつねに御手ふれしものと思へば、崩御の後は座右におきて、朝夕もてならして、いつしか二十年あまり七とせになりぬ」と記され、父上皇の文雅を偲んでおられる。これも、筆者の仮説の傍証となる。

(7) 舟橋秀賢の日記の「慶長日件録」を見ると「幽齋來談」(慶長八・十二・三)と「細川忠興病氣見舞」(慶長十・三・九)などの記事がある。なお細川家の影響かどうか分らないが、舟橋秀賢は漢学のみならず和歌もよくした。例えば慶長八年十一月十六日、禁中で「建保名所百首」の催の時、「由良」「三崎」「天香久山」「松浦山」の題で詠進し、慶長十年には、正月二十一日の冷泉月次会、二月八日の宮中和歌御会、九月十六日の宮中千首和歌御会に出席して作歌に励んでいる。その為、国文学の研究にも努めた。即ち冷泉為満邸の「詠歌大概」講談の発起人となり(慶長九・八・二十八)、小御所で後陽成天皇の「源氏物語」葵巻の勅談を拝聴し(慶長九・十・十八)、中院通村の為に「万葉集」券十三を書写したりしている。

(8) 清原国賢の邸は一条高倉の仙洞北にあったので、東高倉と称せられたが、「慶長日件録」(慶長六・十二・二十四)に、「陽明の処(近衛邸)に参ず。(中略)則ち称号は舟橋と称すべしとの仰せなり」とある。

(9) 「大漢和辞典」は四組の四聖をあげているが、舟橋秀賢は四聖人の像前で乾坤二卦を誦読しているので、上古の伏羲(八卦を作る)中古の文王(卦辞を作る)下古の孔子(十翼を作る)に周公を加えたものか。慶長十年正月一日の「日件録」は、五聖人と記しているのは、朱文公を加えているのだろう。

(10) 「日件録」に、「易伝授式を家君(国賢)新たに書写し給い御進上」(慶長八・十二・七)、「周易御伝授の御道具申し付くべき由仰せ出さる。則ち御細工の土工を召

「翰林五鳳集」について

し寄せ、寸法以下申し付け畢んぬ」(同年四・二十一)とあるように、古今伝授の如く規式にのっとり嚴肅な周易伝授の儀式があったのである。

(11) 豊臣秀頼に「頼而可罷下、大学可有御聴聞云々」(慶長十・十・十)と秀賢は約束したが、実際には講じなかった。秀頼には兵学の「吳子」を講義した。

(12) 幸鶴丸は吉田兼治の息男で、慶長十・六・五から「孝経」を受講するのだが、十一月十八日講了の時「智慧粥薦之」とある。慶長十・一・十三に鶴善丸が「孝経」を読み終った時も「智慧粥催之」と記している。この二例から「孝経」講了の時の慣習と思われ、「国語大辞典(小学館)の智慧粥の説明は不十分である。

(13) 「日件録」に「未刻男子誕生。六、箱講之」(慶長十五・閏二・二十)、「晴。六、箱講之。日野侍從來入、職原抄読書」(同月二十三)とあり対象者不明。自邸で不特定多数に講じたか。

(14) 「鹿死日録」(文禄三・三・二十七)に「午時語心に於て非時の湯漬有り。華麗眼を驚かす」とあり、裕福な塔頭であった。

(15) 月林道皎は後光厳天皇より普光大、幢国師の号を勅諭されたので、この派名がある。月林道皎は久我具房の子で、入して古林清茂の法を嗣ぎ、梅津長福寺を禪寺に改めて中興開山となり、花園法皇の厚い御帰依を受けた。

(16) 「林羅山先生集附録」巻一年講の慶長八年の項参照。

(追記注17) 听叔頭暉は日野難資の息で、有節瑞保の法嗣。最後の鹿死僧録で、後水尾天皇の御戒師を勤め、相国寺中に法塔を建てて、後水尾天皇宸筆の御経と仏舍利を収めた。幕府より碩学料を受けて対馬の以軒庵に住し、朝鮮書契の事に当つた。万治元年正月二十日、七十九歳で示寂。